

## 鳥居清長の空間構成

### — 鈴木春信と歌川豊春の影響を中心に —

宮崎黎（慶応義塾大学）

鳥居清長（1752～1815）は江戸天明期を代表する浮世絵師であり、その美人画はおもに八頭身以上の高身長を特徴とするほか、江戸の風景を描いた合理的な背景描写についても高い評価を獲得してきた。しかしながら、後者の背景描写については、歌川豊春による新たな浮絵の影響が従来から指摘されているものの、いまだ具体的な考察が十分に尽くされていないとは言い難い。本発表では、室内描写と背景描写にみられる清長美人画における空間構成について、その形成過程の検証とともに、後世の浮世絵に対する影響の検討を試みる。

まず、清長による室内描写の原点は、多くの浮世絵師と同じく、鈴木春信に求められる。具体的には、清長による小判揃物「風流座敷八景」（安永中期）が春信の中判揃物「坐鋪八景」（明和三年頃）を模倣している例が挙げられ、それら室内描写は天明期にまで引き継がれている。春信は錦絵においては漢画系の画中画を積極的に用いたが、同様の画中画は清長作にも多く確認され、図様の典拠も春信がすでに依拠した絵本・画譜類に求めることができる。本発表では、中判揃物「児女宝訓女今川」（天明中期）における画中画が、大岡春卜『画史会要』（寛延四年）を参照して描かれること等を具体的に提示したい。

次に清長の背景描写に着目すると、錦絵では安永後期よりその浮絵的要素が明確化する。代表作として挙げられるのは「江戸（都）八景」（中判）と「江戸八景」（横細判）で、これら揃物で描かれる風景は俯瞰視で捉えられ、遠景の消失点へ向かい収斂を示している。のちに美人画の背景として同種の風景描写が頻繁に用いられることから、それらは清長画の背景描写における一つの完成型と位置付けることが可能である。また清長への影響が指摘される豊春については、清長「江戸八景 衣紋坂夜雨」（横細判）と豊春「浮絵和国景跡新吉原中ノ町之図」（横大判）における構図上の類似を手がかりに、再検討をおこなう。本発表では、豊春作に認められる二つの異なる視点の連続性が、清長の美人画背景にも受け継がれている事実について、清長が橋上や二階座敷内に人物を積極的に配置するという描写の特質から検討を加えたい。

なお、清長が作り上げた空間構成の意味は、それをのちに模倣した作品の存在から、より一層明確なものとなるはずである。本発表では窪俊満の作例を取り上げ、俊満が肉筆「臨海宴席図」では清長の「美南見十二候 六月」（大判二枚続）を、錦絵「向島の料理茶屋」（間判三枚続）と「料亭遊宴図」（間判）では清長の『絵本物見岡』（天明五年刊行）を参照している点を指摘し、清長の空間構成を模倣した作例として提示する。俊満の作例を比較例示することにより、そこで学ばれた清長描く二階座敷の空間構成が、豊春の浮絵に由来する背景描写を発展した新たな表現であったことを再確認したい。